

円板状半月板切除術後無症候性の大腿骨外顆 OCD を 発症した 1 例

○中村伸一郎, 中川 泰彰, 小林 雅彦, 中村 孝志

京都大学 整形外科

【目 的】

円板状半月板切除術後に離断性骨軟骨炎 (OCD) が発症する報告は散見される。今回、術後経過観察中に発症した無症候性の OCD を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。

【症 例】

11 歳男性。左膝痛を主訴に当院に紹介受診した。MRI 上変性も見られた左膝外側完全円板状半月板があり、鏡視下に半月板形成術を施行した。この時、MRI 上も関節鏡所見でも関節軟骨及び骨の変化は認められなかった。術後伸展制限や膝関節痛は消失し、1 ヶ月後よりスポーツ復帰もできた。テニスを中心にスポーツを継続し、2 年後の定期受診時に X 線上、左大腿骨外顆に直径約 2cm の骨透明像が出現していた。関節可動域制限や圧痛はなく、MRI 上関節軟骨の損傷が認められないため、透明期の左大腿骨外顆 OCD と診断した。自覚症状が全くないため、そのままテニス等のスポーツを継続する形で経過観察とした。4 年後の現在、自覚症状に変化なく、スポーツも同様に継続している。X 線上骨透明像の軽度縮小が認められた。

【考 察】

Mizuta や Stanitski によると円板状半月板切除術後 20 ヶ月から 65 ヶ月で発症した 8 例の大腿骨外顆 OCD が報告されているが、これらは全て疼痛等を伴っていた。OCD に対しては、保存的治療として安静やスポーツの制限が一般的であるが、今回無症状であったため、そのままスポーツを継続させ、画像上縮小を見た。このまま治癒するかどうかは今後も注意深い経過観察が必要である。